阪大病院 NEWS
No. 92 号
OSAKA UNIVERSITY HOSPITAL
2023(令和5)年10月25日発行
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)
住所／〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-15
TEL ／ 06-6879-5111(代表)
ＱＲコードから本院ホームページをご覧いただけます
https://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp
禁転載（この紙面は再生紙を使っています）

感染症内科で入院診療を開始

「ワクチン外来」など機能も強化

今年7月から本院の感染症内科が入院診療を開始しました。高い専門性を持つ医師が、肺炎、尿路感染症などの一般的な感染症、インフルエンザや新型コロナウイルス感染症などのウイルス疾患、海外帰国後の感染症、性感染症など様々な感染症に対応いたします。また、ワクチン外来などの外来機能も強化いたします。

感染症内科は昨年7月に本院に新たに設立された診療科です。「感染症内科」という診療科はあまり聞き覚えがない、という方も多いのではないでしょうか。当科は、感染症が疑われる方の診断や、感染症と診断された方の治療を行う診療科です。感染症では、発熱、咳、のどの痛みなど様々な症状がみられることがあり、ときに診断が困難なことがあります。また、ときにまれな病原体による感染症や抗菌薬に耐性を示す細菌による感染症など、治療に難渋することがあります。当科は、このような診断困難・治療困難な感染症の患者さんの診療を行うことを使命としています。また、次のパンデミックが起こった際に病院、地域、国の感染症対策を担う、次世代の感染症専門家の育成も私たちの大事なミッションです。これらの目標実現のために、阪大病院感染症内科には全国から日本有数の感染症専門家が集い、日々診療や研究・教育を行っています。

そして、今年7月には当科での入院診療を開始しました。感染症は外来治療だけでは十分でない場合も多々あります。例えば、他の病気で治療中の方が突然、感染症に罹患することも考えられます。そのような時に、入院診療によって最適な治療を提供できるよう、この新たなステップを踏み出しました。他の診療科で治療中の患者さんが感染症に罹患した場合でも、当科が主科として、または他の診療科と連携して治療を行うことが可能になります。これにより、患者さんが多角的な視点からの治療を受けられるようになり、より良い医療が提供可能となると考えています。

新型コロナウイルスは、今なお全世界で大きな問題となっています。本院は新型コロナウイルス感染症の診療においても、大阪府内で重要な役割を果たしてきました。これからは当科も本院に入院した新型コロナウイルス感染症患者さんの診療にも関わり、感染症対策に貢献していきたいと考えています。

感染症は治療だけでなく予防も重要です。私たちは感染症内科外来においてワクチン外来を開設しています。海外渡航前、臓器移植前後などワクチンを必要とする方の相談に対応しています。

感染症は一人ひとりの問題だけではなく、社会全体に関わる問題でもあります。まさに新型コロナウイルス感染症はそうでありましたし、耐性菌対策など一人ひとりの治療だけでなく、広い視野で感染症対策を考えて対策を行わなければならない厄介な相手です。私たち阪大病院感染症内科は、患者さん一人ひとりの健康を守ることに全力で取り組みながら、吹田市、大阪府、そして日本全体の感染症対策にも貢献してまいります。

新 診療科長等ごあいさつ

●外科系科部門長
江口 英利（えぐち ひでとし）

外科系科部門長を拝命いたしました消化器外科長の江口英利です。本部門は心臓血管外科、呼吸器外科、消化器外科、乳腺・内分泌外科、小児外科という外科手術担当の５診療科と、手術や検査などによって患者さんから採取された臓器・組織を顕微鏡などで診断する病理診断科の合計６診療科で構成されています。阪大病院が誇る高度で先進的な外科医療を提供するために、外科系科部門のそれぞれの診療科が協力しながら、各専門分野における最新かつ安全な医療を実践し、患者さんの立場に立った診療を心掛けてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。（令和５年8月26日就任）

国公立私立大学附属病院 医療安全セミナーを開催

令和5年度国公私立大学附属病院医療安全セミナーを6月1日にオンラインで開催しました。本セミナーは全国の大学病院の職員等に対して医療安全に関する最新の知見を提供するため、文部科学省の後援を得て平成16年から大阪大学が毎年主催しています。今年度は、医師、看護師、薬剤師、事務職員など、計529名の参加がありました。

今回のプログラムでは、来年4月から本格的に始まる「医師の働き方改革」に向けた外科の取り組み、薬剤師の協働による大学病院と地域の連携、安全な手術医療や鎮静管理、電子カルテアラートの適切な実装、患者に寄り添う看護など、臨床現場の課題解決の実践例を学びました。

また、近年、国内外で注目されているレジリエンス・エンジニアリング理論に基づき、臨床現場の個人、部門、組織の間の相互作用に着目し、より安全になるように先行的にシステムの改善を図ることの重要性を、事例分析のプロセスとともに紹介しました。参加者からは、本セミナーの受講を通じて新しい知識や活動のヒントを得ることができたと好評でした。

オンラインで開催したセミナーの様子

マスク着用のお願い

私たちの隣にとても感染症に弱い方がおられます
マスクの着用をお願いいたします

この病院には、病気や治療により免疫力が落ちた方がたくさんおられます。待合室でのあなたの隣の、向かいの患者さんがそうかもしれません。少しでも正しいマスク着用によりウイルス拡散の可能性を下げてくださいますようお願いいたします。

大阪大学「ワニ博士」

新型コロナウイルス感染症対策としてのマスクの着用の考え方が見直され、令和５年３月13日からマスクの着用については屋内・屋外にかかわらず個人の判断に委ねられることになりました。

ただし、病院や高齢者施設など、重症化リスクの高い高齢者や基礎疾患のある人が周りにいるときには、普段よりも感染を広げないための配慮が必要です。

厚生労働省も病院や高齢者施設についてはマスク着用の推奨を継続しており、本院でも当面の間は院内のスタッフ、患者さん、ご家族など全ての方にマスク着用をお願いしております。

社会が感染対策の緩和に向かう中でマスクの着用についても、個人の考え方を尊重すべき段階に来ていますが、病院内は感染すると重症化しやすい方が多くいらっしゃるため、引き続きのマスク着用にご協力をお願いいたします。

病院再開発基金へのご寄附のお願い

本院は、良質な医療を提供すると共に、医療人の育成と医療の発展に貢献するという使命を果たすべく、令和７年春の運用開始を目指し病院再開発事業を行っています。本事業には大学病院でしかできない臨床医学研究・開発など将来の医療に必要な部門の整備も含まれています。

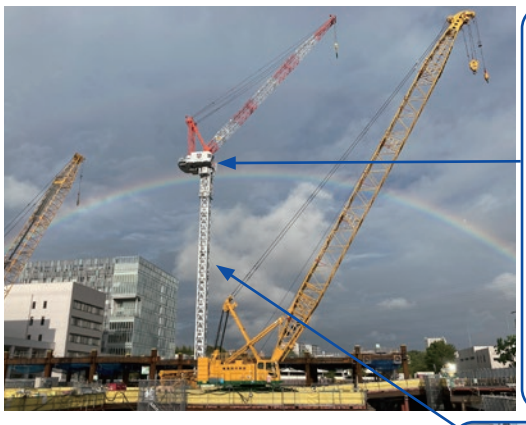
診療機能・未来への医学の研究開発機能のさらなる充実を図るため、今般、「大阪大学医学部附属病院再開発基金」を、大阪大学未来基金に立ち上げました。再開発のコンセプトは、“Futurability待ち遠しくなる未来へ。”です。何卒、本事業の趣旨にご賛同いただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

大阪大学未来基金
●詳しくはこちらをご覧ください

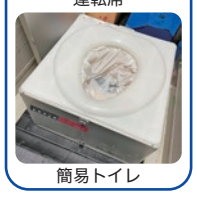
工事を支える２基のタワークレーン

令和7年運用開始予定の「統合診療棟」の建設工事はいよいよ建物躯体となる鉄骨の柱が地上に立ち上がってきました。また、狭い作業エリアを有効に活用するため、固定式のタワークレーンが2基設置されました。

クレーン運転室の高さは地上48メートル。腕を伸ばすと地上100メートルになります。支柱の中には運転室までの長いはしごがあり、運転手は日々このはしごを昇り降りします。運転室にはトイレや空調等が設置されており、何回も行き来せず毎日長い時間続けて作業ができます。効率がアップしてどんどん建物が上に伸びてきています。



運転席


簡易トイレ

タワークレーン
- 中央の赤白のものがタワークレーン。
- 運転席の高さは支柱(マスト)7本を継ぎ足して台座から約48mの高さ。
- つり上げる腕の部分(ジブ)を一番上部に上げると全体の高さは約100m。

運転室へはしごで登る様子

安全に配慮した麻酔管理と疼痛緩和

一人ひとりの患者さんに合わせ

麻酔科

麻酔科は手術における全身麻酔などの印象が強いようですが、患者さんの「周術期（術前～術後）全身管理」と疼痛緩和を業務としており、現在、「麻酔管理」「術前外来」「ペインクリニック」「無痛分娩」の4診療体制で診療を行なっています。

「麻酔管理」とは、患者さんが手術の痛みなどを感じないように調整しながら、呼吸や循環機能を確保し、全身状態を最適に保つことです。難易度の高い、心室補助循環装置植え込み術、先天性心奇形、ロボット手術、経カテーテル的大動脈弁置換術などのほか、重症・ハイリスク症例などの麻酔管理にも携わっています。また、局所麻酔薬だけでは除痛の効果が続かない三叉神経痛に対する三叉神経節高周波熱凝固法においては、苦痛の伴わない全身麻酔を併用し実績をあげています。

藤野裕士　麻酔科長

「術前外来」では、手術前の患者さんやご家族に対して麻酔に関する説明を行い、障害となる問題点の有無などを確認したうえで、同意書にサインをいただきます。

「ペインクリニック」では、外傷後の慢性疼痛や難治性疼痛などの患者さんに、外来または入院による、神経ブロック、薬物療法、低侵襲手術、QOLの向上をめざしたリハビリテーションプログラムや、痛みの心理的側面に注目した心理学的治療などを行なっています。

さらに産科と連携し、麻酔科主導による24時間体制の「無痛分娩」を実施しています。（現在は新規受け入れを停止中）。無痛分娩のニーズは年々増加しており、病棟における無痛管理、週一回の無痛分娩外来、月二回の無痛分娩教室などにも注力しています。また本院は全臓器移植の認定施設でもあり、移植を待つ患者さんの全身管理はもちろん、他の医療機関でドナーが発生した場合は麻酔科医が出向し、臓器の摘出から移植までの臓器管理を行なっています。

当科は、一人ひとりの患者さんの病態や症状に合わせて、安全に最大限配慮した診療を行なっており、地域医療機関への人員派遣を含むさまざまな領域で貢献できるよう尽力しています。

医療機器を調達、滅菌洗浄

国際規格ISO13485も取得

国内病院初

材料部

医療機器には一回しか使用できないものと、洗浄と滅菌を行い複数回使用するものがあり、安全に繰り返し使用するためには衛生面での安全性を確保しながら効率よく洗浄滅菌することが重要です。本院材料部は、院内の医療機器の調達業務と洗浄滅菌業務を担うため1971（昭和46）年に創設されました。2008年4月からは軟性内視鏡の洗浄消毒業務、2009年4月からは従来各部署で実施していた一次洗浄を廃止し、材料部で一元化して業務を担ってきました。院内すべての医療機器の洗浄滅菌業務を担う材料部は、いわば本院のインフラともいうべき重要機能を果たしています。

bsi.
Certificate of Registration

今年6月に材料部が取得した国際規格ISO13485の認証書

スタッフは部長、副部長、第一種滅菌技師の技術職員と特任技術職員各1人で、再利用可能医療機器の洗浄、消毒、滅菌業務には外部委託の社員約60人、1回だけ使用する医療機器の物流業務の発注から在庫管理までの業務には外部委託の社員17人がそれぞれあたっています。ちなみに、年間の軟性内視鏡の洗浄消毒本数は2万本以上になります。

洗浄業務は加圧した水流噴射によって汚れを除去する、大型洗浄器のウオッシャーディスインフェクターの他、減圧下の低温で洗浄器内を沸騰させ、水流噴射が届きにくい部分まで洗浄できる減圧沸騰式洗浄器、さらに、微細な隙間の汚れを除去する超音波洗浄器などを使用しています。

滅菌業務では、金属製の医療機器には飽和水蒸気の熱エネルギーで微生物を殺滅する蒸気滅菌（オートクレーブ）、熱に弱いプラスチックなどの機器には低温蒸気ホルムアルデヒド滅菌や過酸化水素ガスプラズマ滅菌を用いて高品質の滅菌を行っています。

医療機器メーカーと異なり、院内での洗浄や滅菌については法的な規制がなく、日本医療機器学会が発行するガイドラインに則って各病院が自主的に対応しています。どのように医療機器メーカーと同等の安全性と信頼性を確保するかが課題です。そこで本院は国内外の医療機器メーカーが取得している医療機器の品質マネジメントシステム国際規格ISO13485：2016の審査を受け、2回目の挑戦で2023年6月に国内の病院で初めて認証を取得しました。認証取得によって注目が集まり、見学者も相次いでいます。

今後も継続して維持審査と更新審査があります。2025年の統合診療棟への移転時にも認証を受ける必要がありますので、引き続き国際規格に準拠する安全性と信頼性の高い洗浄滅菌体制の維持に努めてまいります。

今後も患者の皆さんが安心して本院での診療を受けていただけるよう、日々努力していきたいと考えております。

PHOTO ホスピタル ミニ・ニュース TOPICS

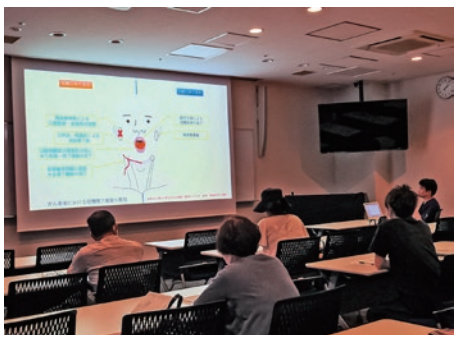
箕面婦人会からタオル帽子106枚をご寄附いただきました。

肌に優しいタオル生地の手作り帽子をご寄附いただきました。患者さんには好みの帽子を選んでいただけたらと思います。箕面婦人会からは平成21年よりタオル帽子のご寄附をいただいておりましたが、先方のご事情により今年で最後になるとのことです。これまでのご寄附に感謝申し上げます。

「光のエール」と「応援メッセージ」を子どもたちに

9月1、3日の両日、世界的な小児がんの啓発活動である「グローバルゴールドセプテンバーキャンペーン」の取り組みの一環として、2023関西学生アメリカンフットボールリーグ公式戦のハーフタイム（ナイター）に、観客らがスマホのライトを空へ掲げ本院に入院中の子どもたち等に向け「光のエール」が送られました。また、10月4日には、各大学の主将が応援メッセージを記したボールが小児医療センターに届けられました。

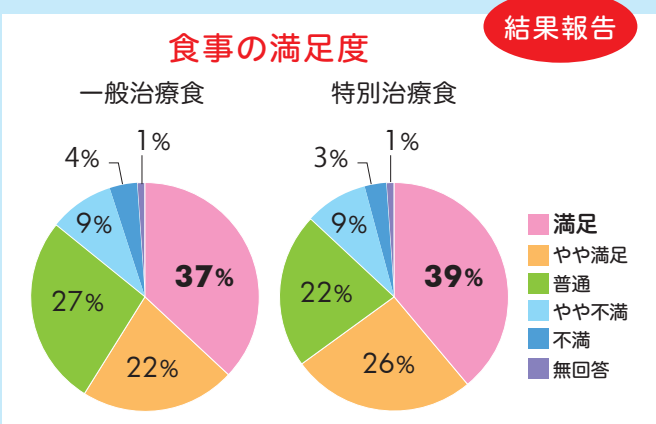
「第25回阪大病院がんサロン」を開催しました。



9月19日にお口の健康とがん治療について、大阪大学歯学部附属病院の歯科医師による講演を行いました。参加された方からは「普段なかなか聞けない事や知らない事を学ぶことができて良かった」などのお声をいただきました。次回は12月に「自分でできる体力づくり」をテーマに、理学療法士、作業療法士による講演を開催予定です。

病院食アンケート

結果報告



入院患者さんを対象に病院食アンケートを実施しました。食事の満足度については、一般治療食では86%、特別治療食では87%の方から『満足・やや満足・普通』と回答いただきました。

また、特別治療食の方へ「改善した方が良いと思われるおかずとその理由」についてうかがったところ、「魚の風味が物足りない、回数が多い」「酢の物の酸っぱさが足りない」「野菜が硬い」等、幅広く具体的なご意見が寄せられました。また、「バラエティに富んでいる」「手間をかけて工夫されている」等の嬉しい感想もいただきました。貴重なご意見を基に今後も検討し、「自宅でも作りたい、食べたい」と思っていただけるような食事を目指して取り組んでまいります。

＼竹原徹郎病院長おすすめ／

夏のカラフルメニュー

メニューの一例

- パエリア
- カレイとそら豆のバジルバターソースかけ
- ガスパチョ
- マリネ
- 金魚ゼリー

今回の竹原病院長おすすめ御膳は夏らしくカラフルに！をテーマに、パエリアやガスパチョをメインとした色鮮やかな洋風料理を提供しました。「病院でパエリアが食べられるとは！美味しかった」「見た目がすごく良くて写真を撮って家族に送った」「彩りが良くて食欲が湧きいつもより食べられた」など嬉しい声が多数寄せられました。本院では毎月の行事食や年に4回のおすすめ御膳を実施しています。患者さんから“入院中の楽しみの一つは食事だ”とよくうかがいます。これからも患者さんに病院食を楽しんでもらえるよう栄養管理室一同取り組んでまいります。